

異学年交流で深まる物語文教材

～問いがつながる複式教育～

宮脇 隼

複式学級では、子どもたちが自ら学習を進めていく。司会・記録を中心に協力し合い学習を進めていく姿は「主体的」という言葉に当てはまるように見える。しかし、子どもたちは与えられた課題に対して一人一人の考えを話し合うことはできるのだが、自分たちで新たな課題を見つけ、それに向けて学習を進める「主体性」はまだ身につけていない。複式学級にとっての「主体的な学び」とは、教師の働きかけだけではなく、自分たちで全体の意見を吟味し、学びを深めていくことだと考えている。それは一人で完結するものではなく、集団としての学びで生み出される。そのため「誰かの問いは自分の問いである」というような受容的な関係が求められる。

また、本学級では複式学級だからこそできる学習をめざし異学年交流を進めてきた。特に、国語科物語文教材に焦点を当て、単元計画を立てた。そうすることで、子どもたち一人一人がつながりを大切にし、自分のストーリーをもって国語の学習に取り組むことができると考えた。

キーワード：複式学級、主体的、異学年交流、物語文、劇化、セレクトタイム

1. 異学年交流をめざして

1. 1. 複式学級だからこそできる学習

昨年度から複式学級を担任することになり、1番に考えたことは授業の成立だった。そのために、2学年の学習内容を「ずらす」ことや、2学年の子どもたちの学習を「わたる」ことを指導の中心においてきた。その考えは今でも変わることはないが、自分の中で疑問に感じる部分もあった。それは、自分の授業づくりが「複式学級の子どもたちをいかに単式学級と同じように授業をするか」という視点で考えているのではないかということだった。昨年度からの経験や、子どもたちとのかかわりの中で「複式だからこそその授業、単式学級には真似のできない授業を作っていきたい」という想いにかわっていった。

本学級の子どもたちは、日々の学校生活において教師からの働きかけがなくとも上級生は下級生を手助けしたり、下級生は上級生を頼ったりする場面がよく見られる。しかし、授業での異学年の交流はそうではない。見られるほとんどの場合が、自分たちの学習におけるゴールを設定したときの「発表の相手」という関わりである。例えば、4年生が調べたことを発信する相手として3年生に向けて行うことや、3年生が4年生に音読を発表することなど、そういった異学年の関わりは様々な場面でよく行われている。学習を進めていく上で、相手意識をもつことは重要だと考えているので、近くにこのような対象がいる環境は本当に素晴らしい。また、その相手が毎日顔を合らし具体的にイメージしやすいことで、子どもたちの学習はより深まってきた。しかし、学習における異学年の交流は「発表の相手」以上進むことはなかった。

1. 2. 学習意欲を高める「セレクトタイム」

本学級では、朝の10分間の取り組みを「セレクトタイム」と名付け様々な活動を行っている。毎日の10分間は国語科として位置づけられ、本校では「読書タイム」として、子どもたちの読書量を増やすための時間に設定されている。しかし、昨年度の子どもたちの実態を見ていると読書の時間としての役割も大きいのだが、自分にとってしなければならないことに時間を使いたいと考えている子がいるように感じた。この10分間を子どもたちにとって自ら進んで国語科と関わることができる時間にしたいと考え「セレクトタイム」と設定した。そうすることで、今の自分にとって大切なことや、クラスみんなで取り組んでいることなどを常に意識して、一人一人が意欲的に取り組む毎朝の10分間にしていきたいと考えた。

活動にある程度の自由度をもたせることで、今までは一人で行って読書の時間から、クラスメイトと考えるセレクトタイムに変化させた。授業中の異学年交流をめざすために、このセレクトタイムが気軽な異学年交流が生みやすい場になればという思いも込められている。

【セレクトタイムメニュー（見通し）】

セレクトタイムメニューを用意し、具体的な例を提示する。また、教師から与えるものだけではなく、自分たちで考えたものもどんどん採用していく。

（一人で）

読書、漢字クイズ、意味調べ、短歌俳句、詩、作文、新聞、絵、マイディクショナリー（新語句をためる）

（ペア、グループで）

国語作戦タイム…3年生と4年生、同じ学年、教師

と、司会、記録など、目的をもったつながりで作業

を行ったり、学習の進め方などを話し合ったりする。
(学年で)
授業や発表にむけての取り組み
(クラス全体で)
授業や発表にむけての取り組み、話し合い

【セレクトノート（振り返り）】

セレクトタイム専用のノートを持たせる。普段は詩を書いたり、読んだ本を記録したり、一人一人が考えた活動に役立てるものである。しかし、定期的にセレクトタイムの振り返りを書かせる。また、それをクラスで交流していく。そうすることで、今までの自分の取り組みを客観的に知ることができ、次の取り組みへとつなげることができる。また、友だちの考えや取り組みを知り、共通の目的をもった友だちとのつながりが生まれると考えている。

2. 「もうすぐ雨に／一つの花」の実践 二つの視点で読み取ろう！

この実践では、活用場面の異学年交流だけでなく、習得場面の異学年交流を目指し計画した。両学年が物語文を学習する際、同じ視点での読み取りや、単元としてのゴールを同じものに設定するなど共通の部分を意図的に取り入れた。

2. 1. 読み取る視点につながり

それぞれの学年を2グループずつにわけ、異なる視点で物語を読み取らせる学習を行った。一つの課題に対して、異なる視点で読み進めていくことでそれぞれのグループに問いや考えが生まれ、それを全体で交流することで共通する部分や異なる部分があらわれる。そうすることで、新たな問いへとつながっていくと考えたからだ。また、3年生と4年生の読み取りの視点に系統性をもたせることで、学年を越えたつながりが生まれると考えた。複式学級の特性をいかし、3年生は4年生に学び、4年生は3年生への声かけを行うことで、自分たちの振り返りができると考えた。

【読み取りの二つの視点】

3年生は【主人公の言葉（心の声）】【主人公の行動】という視点で読み取らせた。「もうすぐ雨に」は、動物の言葉がわかるようになる「ぼく」の心情を中心として進められる。言葉がわかるようになるきっかけも明確で、子どもたちにとってファンタジー部分と現実部分の境目もつかみやすい物語である。様々な生き物との会話の掛け合いもユーモアがあり、それぞれの場面を想像しやすい。また、1の場面では生き物の考えていることが知りたいと願う主人公が、最後の場面では「でも、トラノスケがなんて言いたいのか、ぼくには、よく、わかったよ。」という一文で物語が締めくくられており、主人公の心の成長を感じ取ることができる。読者にとってもこの物語を読み深めていく上で「トラ

ノスケの言いたいこと」ということに想像を広げることが、深く味わうことができたのかという一つの指針になると考えた。ぼくとトラノスケの交流やぼくと様々な生き物との関わりを二つの視点で読み取っていくことで、主人公と同じような成長（心の距離感の近づき）を子どもたちにもさせたいと考えた。

4年生は【言動や行動】【物語上に登場する重要なアイテム】という視点で読み取らせた。「一つの花」は、登場人物が少ない。場面の分かれ目もわかりやすく、全体の構成も、戦争中と戦争後というようにとらえやすい物語となっている。ゆみ子家族の言動や行動と、物語上に登場する重要なアイテムの効果について考えながら読み取らせた。例えば、「一つだけよ」という母の口癖や、父がきまってする高い高い、戦時中におけるおにぎり、クラマックス場面から後日談へと続くコスモスなど。これらの重要なアイテムが一つの花における読み取りに深まりをもたせている。また、クライマックス場面でのゆみ子家族とコスモスの関係性も子どもたちには考えさせた。「どうして父はゆみ子にコスモスをあげたのだろうか。」という課題に対して、言葉や行動だけの読み取りでは「かわいそうだから。」「ほしがっているから。」という読み取りになると考えられた。場面の様子やアイテムとしてコスモスを考えたとき、このコスモスの役割、このコスモスだからこそ物語の深まりがうまれていることを子どもたちに考えさせたかった。

この二つの視点は、発達の段階において少しの違いはあるが、中心人物の言葉や行動からの心情の読み取りという所は共通させた。

また、単元のゴールを劇化と設定した。読み取りの方法も共通性をもたせることや、同じゴールをめざすことで活用場面だけではなく、習得場面での交流をめざした。



図1：二つの視点で読み取り（3年生）



図2：二つの視点で読み取り（4年生）

3. 「モチモチの木／ごんぎつね」の実践 異学年で語り合う文学の世界

3. 1. 異学年交流へのさらなる挑戦

この実践では、異学年の交流を目指すに当たり三つの取り組みを設定した。

一つ目は、物語文を劇化するという単元のゴールをそろえたことである。どちらの学年も同じ目標をもつことで、異学年の交流が生まれやすい環境になると考えている。また、どちらの学年も劇化にあたり、本文から台本に作り変える。教科書の本文をそのまま行うのではなく、台本をつくるという同じ活動を入れることでお互いに意識をしながら学習を進めることができる。また、台本作りは国語科として読みを深めるためのものである。本学級の子どもたちは1学期にも物語を劇化したのだが、本文を大きく変えることはなく音読劇のようであった。そのため、ナレーターの役割が大きく、登場人物がいきいきと動くようなものではなかった。地の文をナレーターが読んでいる間は役者の動きが止まってしまう、次のナレーターの言葉を待つような姿が見られた。テキストをほとんど変えることのない状態で劇化した場合、地の文が多くなってしまふ。理想とする劇は、登場人物の会話文や行動を通して物語の内容を伝えていくものである。そのためにも子どもたちは、内容を理解することと登場人物の心情を確かに読み取ることが重要となる。台本作りのポイントは私と子どもたちとの話し合いで出たものは以下の点である。

- ・地の文を少なくし、登場人物の会話でストーリーを進めるようにする。
- ・ストーリーの流れを、登場人物の会話として書き換える。
- ・情景描写や場面の様子などは残し、心情を表している情景描写などは特に大切にする。
- ・位置関係、タイミング、動きを考える。

二つ目は、異学年同教材の時間を取り入れたことである。本単元では「モチモチの木」を4年生がもう一

度学習し、「ごんぎつね」を3年生も学習する時間とっている。異学年同教材の場面を作ることで、子どもたちに必然性をもって異学年交流の形を作っていくと考えた。4年生は3年生の「モチモチの木」の読み取りを支え、3年生の問いかけから4年生は「ごんぎつね」の読みを深めていく。3年生は知らないからこそ言えること、4年生は知っているからこそ言えることがある。そのためにも、子どもたちには自分の感じたことを自分の言葉で語り合うことを大切にさせている。そして、語り合ったことをもとにして台本を作り、劇として発表したい。劇の完成をめざし、互いの劇を見合う中で、自然な形で必要性をもった異学年の交流を計画している。

三つ目は、習得から活用ではなく、まず活用からはじめることである。今までの学習では、単元の目標を達成するにあたり、教科書教材を丁寧に読み取ることが優先させてきた。そうすることが、活用するために重要だと考えていたからである。しかし、私自身の反省として、習得する場面での課題は子どもたちからの課題というよりも、教師が意図的に作り出した課題だった。子どもたちの初発の感想から汲み取ったものとしても、クラス全体の課題とは言い切れないものだった。そこで、まずは活用から始め、自分たちで進めていく中で見つかる課題を全体の課題として話し合うことにした。物語を場面ごとにわけ、まずは劇化してみる。そして、見つかった課題をクラス全体で話し合い、もう一度劇に返る。必要性をもったサイクルで学習を進めることで、子どもたちの自分たちで学習を進めているという実感を大切にしたい。本当の必要性の中から異学年で交流する姿がみられると考えた。

3. 2. 授業記録から

本実践では、何度も異学年で学習を深める場面が見られた。3年生の「モチモチの木」の読み取りに、4年生の前年度の学習が活かされ、話し合いを通して3年生の理解が深まった場面。

「モチモチの木」3場面の終わりから、4場面で夜中に目を覚ました豆太がじさまの異変に気づく場面。実際の劇をもとにして、位置関係に注目しながら、二人の心情を話し合っていた。名前前の番号は学年。

3年生：（3場面を演じ終わる）

③ゆう：劇を見た感想を教えてください。

④そうや：みんな声が出ていいと思うんやけど、豆太とじさまが離れすぎてると思うんやけど。

④あやか：私も思った。教科書には「じさまのたばこくさいむねん中に鼻をおしつけて・・・」って書いてるから二人が寝るときはもっと

近い方がいいと思う。

③ゆう、③だいすけ：こんな感じかな。(実際にもう一度演じてみる。)

このとき、ゆうは寝ているだいすけの横から胸のところに顔をもっていつて寝る体制になっていた。アルファベットのTのような形。

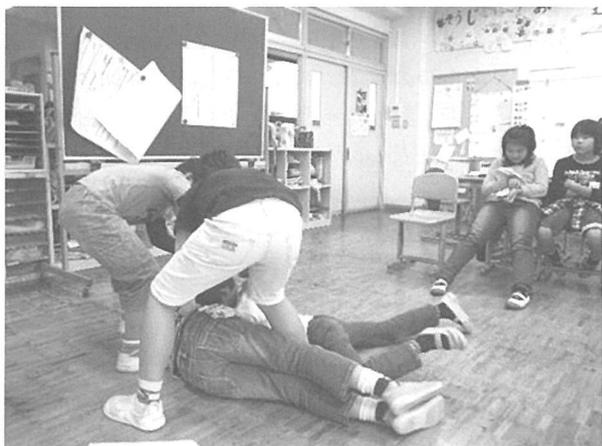


図3：本文をもとに中心人物の位置を考える

④けんた：そうじゃなくて、(二人をの体を移動させながら)豆太はじさまに並んで横にくる感じ。教科書にも書いてるけど、この家にはふとんが一枚しかないってなってるやろ。だからその寝方やったら豆太は布団からはみ出してしまう。冬やのに寒いやん。

3年生：(うなずきながら)ほんまや。

教師：4年生のみんなは教科書に書いていることをもとにしているから分かりやすいね。

でも、寒いからなら横に寝るだけでもいいやん。なんでわざわざ「たばこくさいむねん中」に鼻をおしつけるようにして寝るのかな。みんなやったらする。

③ねね：わたしやったら、たばこのにおい苦手やからせんかも。

③れな：でも、豆太はまだまだ小さくて怖がってるからじさまにすごいくつつくとやと思うな。このときは、豆太の苦手な夜やし。

教師：なるほどなあ。演技するときの二人の場所からも二人がどんなことを考えているのかがわかってくるね。

この、4年生からの位置関係へのアドバイスから3年生の劇作りは大きく変わっていった。より心情を考えた位置関係であったり、逆に位置関係からそのときの心情を考える場面がたびたび見られるようになった。4年生は、昨年度の自分たちの学習をいかしたアドバイスをすることができた。また、同時に進めている「ごんぎつね」では、ごんと兵十の位置関係をもとに心情を読み取っていたので、自分たちが学習していることを3年生に伝えるというとてもいい場面になった。

【子どもたちのノートから】

・④けんたが豆太の家にはふとんが一枚しかないから、もっとくつついて寝るといつてくれたのはとてもよかった。

・④けんたが、鼻をおしつけて一枚しか布団がないと書いているから足をもっと近づけたらいいと思う。

・④けんたが、教科書に書かれている内容で話をしていたことがよかった。私も真似したい。



図4：異学年の交流から深まる読み取り

4. 成果と課題

授業中の異学年交流を目指し、国語の学習では両学年が物語文を学習する際、同じ視点での読み取りや、単元を貫く言語活動として同じゴールを設定するなど共通の部分を意図的に取り入れてきた。しかし、子どもたちにとっては交流の必要性がうすく、授業中の交流に至ることはできなかった。また、教材選びも重要であることが見えてきた。教科書をそのままの順序で行うことにこだわらず、4年生と3年生をどちらも戦争を題材にした物語でそろえることで、子どもたちのかかわりは大きく変化することが考えられる。実際に、二つ目の実践では3年生と4年生の教材を共通点の多いものにそろえることで、子どもたちの交流する姿勢は大きく変化した。また、同じ教材をともに扱う時間をもつことでより深い読み取りにつながるすることができた。

ただ、本校の複式学級において異学年交流がないことは、1年生のころから積み上げてきた自分たちで学習を進めていく文化によるものもあり、一概には否定をすることができない。しかし、複式学級だからこそできるという学習のかたちが異学年の交流にはある。そんな学習を、子どもたちと楽しみながら模索していきたい。

参考文献

- ・文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説国語編」
- ・二瓶弘行(2011)「物語授業づくり一日講座」文溪堂
- ・(2014)和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No.37
- ・(2015)和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No.38